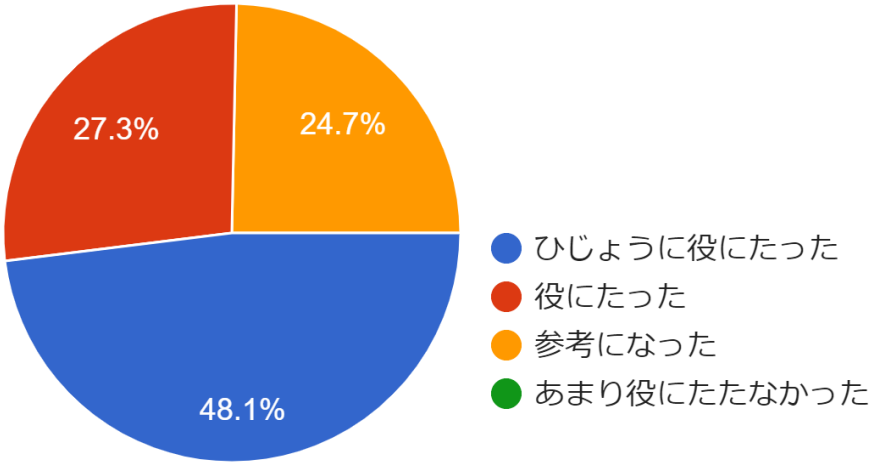
揖斐郡教育研修センター通信第７号　夏季研修Ⅱ特集号　Ｒ４．８．１５

令和４年度夏季研修Ⅱ（不登校対応）　還元度アンケートのまとめ

研修の満足度



北浦　理　先生の講演を聞いてこれからの実践で大切にしたいと思ったこと

(1) 児童の個性の承認

- 感じ方や学習のスピードなどは人それぞれだということを児童生徒に気づかせる教育や支援をして、まずは認めてあげることを大切にしたいと思った。
- 大人は子供の道標という言葉があり、子供の手本となれるように努めていきたいと思った。
- 子ども一人一人の感じ方や価値観、背景に背負う環境をよく理解することが必要で児童・生徒と会話することに心がける必要がある。
- 不安のなか、生活している子どもたちの道しるべになれるよう、また、安心して子供が決めていくことができるように、支援していきたい。
- ただ聞くばかりの受容ではなく、相手に気持ちを伝え表現させる受容をしていきたい。
- 子どもの立場にたち、傾聴の姿勢を大切にした大切にした指導を行なっていきたい。
- 人の感じ方や考え方、学習するスピードは、人それぞれ違うということを再確認することができました。
- 子どもの話を聞く時に、自分の気持ちを伝えたうえで、相手の気持ちを共感し、子ども達の思いや願いを感じ取り、その実現や達成のために努力していきたい。
- みんな違って当たり前、同じものを見たり聞いたりしても人はそれぞれ感じ方が異なるということを、学級での授業の時になどにも認識して進め、子どもたち一人一人とかかわり関係づくりをしていきたい。
- 見方を固定しない。広くものを見ることの意識を高めたい。
- 同じものを見たり聞いたりしても、人それぞれ感じ方はちがうということは子どもへの指導においてとても大切だと思った。「こうすれば全ての児童がわかるであろう」と考えるのではなく、児童一人一人に合った指導を考えることが必要だと感じた。

- 不登校児童への支援を学ぶことで、そうでない児童への支援を考え直すことができた。基本的に一人一人の特性に寄り添うことは同じであることが分かった。
- 西濃学園について、詳しく知ることができてとても勉強になった。キーワードととして、「みんなが違って当たり前でよい」、「見ても聞いても答えがわからない子どもの気持ち」、「子どもには未来がある。大人には過去がある」という言葉が印象に残った。

(2) 児童への寄り添い

- 一人一に寄り添い、小さな会話を積み重ねることの大切さを、改めて感じた。
- 同じものを見ても感じ方はそれぞれ違う子ども達であるので、一人一人に寄り添える接し方を大切にしていきたいと思った。
- 生徒の心に寄り添うということは、「認める」「許す」こと。また「待つ」「排除しない」「協力」も大切であることだと感じたので、子どもへの声かけを肯定的なものにすることを改めて心がけていきたい。

- 不登校生徒の心に寄り添えるように自信・希望・仲間関係を築くことを大切にしたい。
- ライフプランニングだけでなく、普段から、繰り返して確認、肯定的に言い換えることを大切にしたい。また、不登校の生徒だけでなく、全ての児童生徒に接するときに意識していきたい。
- 今接している不登校傾向の児童との関りの中で、西濃学園の考えや生活、先生の対応などに本当に納得した。
- 今日の講演で「こころの栄養素」という話を聞き、その栄養素を満たすために必要な活動や関わり方という視点をもっていきたいと思った。
- 「小さな会話・意見を決めつけず主観で話す・一緒に考える」ことを特に大切にしていきたい。日頃から、コミュニケーションを頻繁にとり、学校が児童一人一人の安心感のある場所になるように心がけていきたい。
- 私たち大人は，過去の体験や経験をもとによりよい人とのかかわり方や SOS の出し方等の道しるべとなっていきたいと思った。mた、アンテナを高く張り，児童生徒の心に寄り添っていこうと改めて思った。
- 今までは「勉強にやる気が出ない。分からない。」等の相談があった場合、「分からないところあるよね。」と返し、共感することがいいと思っていた。しかし、そのような聞き方ではなく、「今、困っているのはどんなところ？教えてくれる？」など一緒に問題を解決できるような話ができるといいと思った。
- 一番実践したいと思ったことは、小さな会話を積み重ねる（どうでもいいような会話）こと。まずは子どもの心を開くことからすべてが始まると思った。
- 自分の価値観だけでなく、多方面から生徒を捉えることで、生徒理解につなげていきたいと思った。
- 生徒の心に寄り添うポイントとして、自信、希望、仲間が大切であることがわかった。それらを頭に置きながら子供たちと関わっていこうと思う。

(3) 教師の指導

- 教職員の姿勢として、「人を認める許す」、「待つ」、「協力」を大切にしていきたい。
- 人を認める・許す、待つ・辛抱する、協力する・仲間を作る　などの教師の姿勢を大切にしたいと思った。
- 気づかせる教育や支援、自分の気持ちを伝えた上で相手の気持ちに共感することや、肯定的に言葉を言い換えることを大切にしていきたいと思った。個別の対応や指導の具体例を示され、会話を積み重ねるが余計な一言を言わないということが心に残った。自分が気をつけなくてはならない点だと思った。

- 生徒の将来、社会参加についての想いに寄り添いながら指導にあたりたい。
- 子どもが自信や希望をもち，自己肯定感が高まる指導をしていきたい。共感的理解を大切にして，子どもが自分で気付く，子どもに気付かせる支援をしていく中で，成功体験を積ませていくことを心がけたい。

- 人として、子供が道しるべにできるような教師になること。教師として、認める・許す、待つ・辛抱する・排除しない教員としての姿勢を大切にしたい。
- 校内での連携、特別なことでなく普段の生徒への接し方や子どもとの会話の積み重ねを大切にしたと思った。
- 特に心に残ったキーワードは“教職員の姿勢“、“気づかせる教育・支援“、“心と身体を使う指導“の三つで、改めて、子供たちと向かい合う姿や気持について考えさせられた。
- 「集団でできる体験」を少しでもできるように配慮・工夫をしていきたいと感じた。雑談やどうでもいい会話を大事にした上で言うべきことは言う、というのは自分も心がけていることで、実践に自信が持てた。
- 講話から心は、筋肉と同じという言葉が印象に残った。子どもそれぞれにあった目標を与え、乗り越える為には、たくさんのエネルギーを使うけれども、その分筋肉のように心も成長することを改めて実感することができた。ただ単に負荷をかけるのではなく、どうしたら大きな筋肉なるのかと考えるように心を育てるための手立てを教師と子どもが一緒になって考えていくことが子どもへの成長に繋がると思った。

(4) 職員間の連携

- 職員間の関係性は生徒の関係に移っていくので、よく会話をして、生徒を支えていこうと思った。
- 職員間の連携を意義あるものへと高め、児童生徒の個のニーズに応じた対応していきたい。
- 現在もっている学級にも不登校傾向の生徒がおり、自分ではしっかり向き合おうとしているつもりでも、その生徒はもちろん、保護者の方の話を含め、本音で向き合えていたかと思うと、改善の余地があると思った。また、一人で抱え込むのではなく、他の先生方との連携も大切にしながら、複数の目で対応していきたいと思った。
- 職員間の連携を大切にしていくことの重要性は常に言われているが、より一層大切だと感じた。些細な情報も踏まえて、密に連携していきたい。
- 西濃学園の建学の精神の一つの自立･社会参加という部分を大切にした教育をしていることがよく分かった。我々はつい目先の成果を期待したり１年の中で勝負しようとしたりしてしまいがちだが、不登校の児童生徒の最大の目標は自立することであり、社会参加することなので長い目で彼らを捉えることが大切であると改めて実感した。
- 教職員としての姿勢として、人それぞれ感じ方が違うことを念頭に、子どもたち一人一人のよさを映し返し、未来への憧れを提供し、思いを共有できる存在となれるよう子どもたちに寄り添っていきたいと思った。
- 子どもたちが本来もっている「成長したいという意欲」を、支援する中で引き出せるとよいと思った。そのためにも、教職員が連携・共有して対応することを大切にしていきたい。。

保護者との連携

- 職員の連携だけでなく、保護者、関係機関の人と連携をしていくことがより大切であることが分かった。

西濃学園 SC 太田宣子先生の講演を聞いてこれからの実践で大切にしたいと思ったこと

(1) 児童生徒理解･信頼関係

- 授業を受けることを目的としないとおっしゃられていたことが印象的だった。まずは児童生徒のペースを受け止めて、社会参加できることを目的として手助けできるように、信頼関係を気づくことを大切にしたい。
- 本校の生徒にも不登校生徒がいるので、生徒のペースに合わせて、寄り添った指導をして行きながら、進路選択につなげていきたい。
- 不登校生徒の悩みでこちら側があまり侵入的にならないように気をつけたい。またどうしても学校に来れるようにすることが一番良いことと考えてしまうので、その子にとってどうすることが最適かを考えるようにしようと思った。

- 子どもたちが発信するいつもと違うサインを見逃さずに，それらの情報を職員間で共有することを大切にしたい。また，教育相談やケース会議を充実させ，個別の指導対応や１人１人の子どもに必要なスキルを身に付けさせていきたい。
- 子どものベースを大事にして寄り添うことが信頼関係づくりにつながること、それが自立の支援になることや、SC と他の職員との情報共有の大切さについて改めて学ぶことができた。
- 西濃学園ではひとりひとりに寄り添う姿勢がとても大切にされており、勉強になった。自己肯定感をもつためには、生徒の思いを尊重することが大切なので、これからの実践でも意識していきたい。
- カウンセリングに限らず、常に子供の話に耳を傾け自己表現を支える教員でいること。親の気持ちによりそいともに子供の幸せを考える存在になることが大切だと感じた。
- 寝られていないことやテンションが高いのは危険信号と言う言葉が印象に残った。テンションが高いと安心してしてしまうが、普段と様子が違うということとしても捉えることができるので、普段と様子が違ったらどんな些細なことでも反応し情報共有をしたい。
- 子どもの背景にあるものもしっかり考えること、日常の些細な理解の積み重ねによって、コミュニケーションが採られていることを理解して接していきたい。

(2) カウンセリングスキル

- 社会情動スキルの大切さを再認識した。保護者の心にも寄り添うことの大切さも再認識しました。
- カウンセリングでは、教室で授業を受けることができるようになることを目的にしないことがわかった。その子が社会に出た時にどんなスキルが必要か考えて支援したい。
- 児童生徒個々の発達や求められるスキルに対する細やかな共有が大切なので、教師の共通理解を継続的に実践にあたりたい。
- 社会参加のできるスキルをいろいろな人との関わりの中で身につけ、自信を持って生きていける一人ひとりになる教育と支援ができるよう実践していきたい。
- 多くの実践や研究によって確かめられた支援のスキルを学ぶことは、多様な子供や保護者の思いを理解し支えるために必要なことだとわかった。
- スクールカウンセラーの先生の専門的な言葉や考え方を学ぶことができた。カウンセリングにあたり、侵入的な話をしたときは、心が消耗すること。共通理解をして、優しいことばがけをすることが大切だということがわかった。
- 大きな学校でも小さい学校でも、子どもたちが何を訴えているのかやどんな気持ちなのかを時間をかけながら共感していくことが大切だと思った。また、SST やアンガーマネジメントなど、子どもの実態に取り組むことにより、自信をもって発表ができたり、進んで仲間に関わろうとできたりするので夏休み中に勉強をして、自校でも実践していきたいとおもった。
- さまざまな子がいるが、一人一人の丁寧なカウンセリング方法を教えていただいたので活用するとともに、保護者へのカウンセリングも重視したい。

(3) 指導及び環境づくり

- 他者に相談できる力､環境､関係性づくり、居場所作りを大切にしていきたい。

- 子供のテンションが高い時は、元気なのではなく要注意だという学びがあったので、夏休み明けから子供の様子をコミュニケーションを通して把握して指導にあたりたい。
- ２学期は良いところへのアプローチを増やし、課題とも向き合える児童になってほしいと思った。
- 児童が希望するのであれば、別室で過ごす時間も大切にしたいと思った。どうしても教室で授業を受けさせることを念頭において本人と接してしまうので、大らかな気持ちで接していかねばと反省した。
- 今、特別支援学級の担任をしているが、太田先生のお話のような子どもたちが何人も学級にいるので、日々冷静に、あたたかくかかわっていきたいと思った。
- 教室へいけない児童をどうしたら教室復帰できるのかと思いがちで、児童の思いとは相反した

教師の思いを感じていたのだろうと反省した。子どもと保護者の話を心で聴くことと，保護者への労いと感謝の気持ちをもち続けようと思いました。

- 子ども達の言葉や行動に表れてきたことは勿論のこと、その言葉や行動に表現できていない心の思いに少しでも寄り添えるようなあらゆる努力をしていかなければならないと思った。
- これまで、子どもの中には自傷や他害のある姿を見てきたが、自分を守るために攻撃的になりやすいというお話をお聞きして、子どもの気持ちを理解することの大切さを学んだ。今後はこの子ども達が抱える辛い気持ちを受けとめながら、体と心のバランスを上手にとり、子どものペースを大事にしていきたいと思った。
- 心に残ったこととして、「あせらず、じっくり見通しを立てて関わる」「保護者が親であることを支える」「自分のペースで自分らしく過ごすことが成長していきたいにつながる」などがあります。それらを支える基盤には教職員間の共通理解や連携が大切だと改めて感じた。また、子どもにも保護者にも日頃からのコミュニケーションがあってこそ、初めて支援や指導につなげていけると感じた。
- 「れんげ教室を利用する子どもに対して、教室に戻ることを目標としないことを共通理解している」という話が心に残った。自校にも保健室登校の児童がいるが、その子の目標をどこに設定するのかよく話し合い、共通理解しておくことが必要であると感じた。

(4) 職員間・スクールカウンセラーとの連携

- SC との連携やを職員間の連携を大切にし、ケース会議で、各教職員ができること、できないことを明らかにして、各教職員の動きを明確にすることが大切であると分かった。
- SC の具体的な活用のイメージが持てた。様々な立場から生徒にアプローチしていくことは大切なので、連携から得た情報を元に、生徒の成長に還元できるようにしていきたい。
- れんげ教室の存在、公立ではなかなかできないが、必要としているお子さんはいるだろうと強く思った。ケース会議を開くことがあるので、理解の共有だけでなく、自分にできることできないことを全体の場で伝えることまでを実践したいと思った。
- ケース会では、共通理解にとどまらず、それぞれ何ができるか考え、いつ、どんな場で、何をするのかというところまで交流したいと思った。
- 子どもの未来をイメージし、その子の人生のために学校全体がチームとなって関わっていく重要性を学んだ。
- 教育活動をしていく中で、研究・研修の重要性を感じた。
- SC の先生との連携し、児童の様子から今後の支援についてさらに具体的に進めていきたいと思った。
- 本校では、担任だけでなく、管理職も教育相談をしている。カウンセリングの方法を検討して２学期から全職員で共有しながらすすめていきたいと思った。
- 学校職員みんなで情報を共有し、協力して指導に当たりたい。SST やエンカウンターも取り入れていきたい。
- 専門性を高めたい。チームとして、対応する学校づくりをしていきたい。
- 西濃学園には臨床部があり、一人にとことん寄り添うこと、寄り添う方法がすごく勉強になった。臨床部がしっかりと機能しているということは、情報の共有と連携を大切にされているからこそだということが伝わった。

(5) 保護者との連携

- 子供を育てていくには児童及び保護者の想いに寄り添った関わりが大切だと思った。
- 保護者への対応の仕方で、「親であること」の大変さや頑張りを認め寄り添うような言葉かけや態度を大切にしていきたいと思った。
- 保護者の方からあれこれ言われると、私自身パニックになってしまうこともあった、日頃の雑談や、愚痴を受け止めていけるいける関係は、やはり大事だと思った。
- 児童を支援するだけでなく、保護者も支えていくことが大切なのだと改めて感じた。学校・家庭・地域で児童を支え、成長を見守る姿勢を大切にしたい。
- 親の「親であること」を支える理解の共有に終わらないというフレーズが心に残った。教職員の意識一つで変えていけることだと思うので、日々の懇談やケース会でそういったところまで突き詰めていきたいと感じた。
- 本人の自己実現を支えるため、よいところにアプローチし、自己肯定感を高めていく。また、保護者についても、親が親であることを支えながら、一緒に進んでいくことが大切だと思った。
- 保護者への心理教育相談やカウンセリングを充実させることが、子どもの指導につながると感じた。保護者との関係づくりを大切にしていきたい。

※いただいた令和５年度の研修についての意見は今後検討し、次年度の研修計画に反映させていきます。